法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-22

グアム開催第12回太平洋芸術祭と文化の政治

YAMAMOTO, Matori / 山本, 真鳥

(出版者 / Publisher)
法政大学経済学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
The Hosei University Economic Review / 経済志林
(巻 / Volume)
84
(号 / Number)
4
(開始ページ / Start Page)
103
(終了ページ / End Page)
132
(発行年 / Year)
2017-03-20
(URL)
https://doi.org/10.15002/00013819

グアム開催第12回太平洋芸術祭と文化の政治

山　本　真　鳥

1. はじめに
2. 背景
3. ５月22日初日の行事
4. 23日以降のプログラム
　4.1　パフォーミング・アーツ会場
　4.2　フェスティバル・ビレッジ会場
　4.3　博物館会場
　4.4　グアム大学会場
　4.5　その他の会場
5. 開催国グアムと先住民運動
6. むすび

1.　はじめに

第12回太平洋芸術祭（Festival of Pacific Arts）は2016年５月22日日曜日から６月４日土曜日まで，２週間の間，グアムにて開催された。この催しは４年に一度，オリンピックと同じ年に，太平洋のいずれかの国ないし地域に，それぞれの国家や地域代表を集めて行われる。

今回集まったのは，アメリカ領サモア，オーストラリア，クック諸島，

フィジー，ミクロネシア連邦，フランス領ポリネシア，グアム，ハワイ，キリバス，マーシャル，ナウル，ニューカレドニア，ニュージーランド，ニウエ，ノーフォーク島，北マリアナ諸島，パラオ，パプアニューギニア，ピトケアン諸島，ラパヌイ（イースター島，チリ），サモア独立国，ソロモン諸島，台湾（原住民），トケラウ，トンガ，ツバル，ヴァヌアツ，ワリス・フツナの28カ国・地域（abc順）である。すべての国や地域代表としてやってくるのは先住民の人々[1]で，ハワイからはハワイ人，オーストラリアからはアボリジニとトーレス諸島人，ニュージーランドからはマオリ人，台湾からは原住民[2]となっている。

芸術祭で開催されるのは，芸術の様々な分野にわたるが，中心となっているのは，伝統的な歌やダンスである。「伝統的」[3]といっても，この地域では多くの文化変容があり，キリスト教の導入後に失われてしまったのを近年になって再興したものもあるし，観光開発の結果脚光を浴びるようになったものもあるが，人々が昔から歌ったり踊ったりしていたと考えている歌やダンスがそれである。しかしモダンなダンスが含まれることもある。ニューカレドニア代表の中には，10代のラップダンサーが複数含まれていた。さらに劇，映画，絵画や彫刻の展示，講演，シンポジウム，薬草のワークショップ，編み物（天然素材で編むバスケットなど）のワークショップ，タトゥーの実演，朗読会，作家会議，ファッションショー，お土産品の製作実演・販売などなどである。

太平洋諸国からの代表は，自分たちの文化を演ずるのを見つめる観客が

1）2000年のニューカレドニアでの芸術祭では，フィジー代表がマルチエスニック集団（フィジー系，インド系，中国系，ロツマ（ポリネシア人））で構成されていたが，その後，フィジー代表もフィジー系だけで構成されるのを常としている。

2）台湾では先住民を「原住民」と呼んでいる。

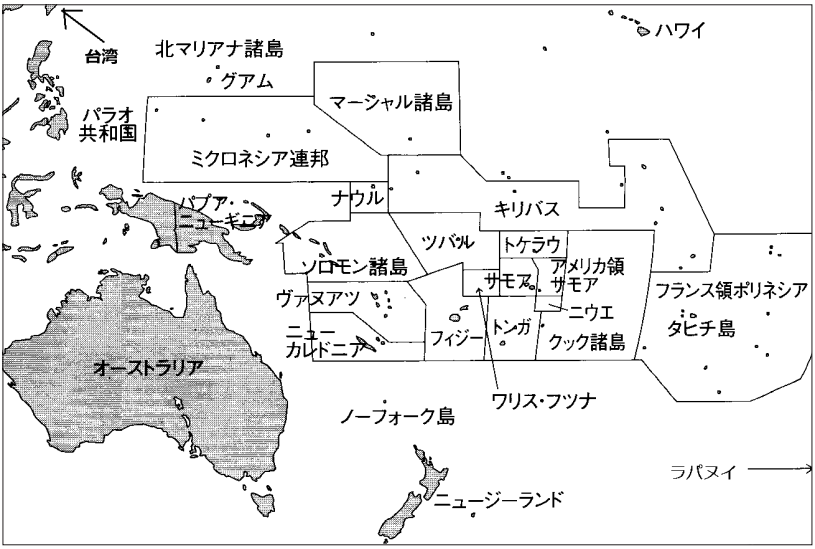
3）「伝統」とは何かという議論は，ホブズボウムとレンジャーの出版（Hobsbaum and Ranger 1983）によって火が付き，1980年代後半から10年間ほど盛んに行われた。人々が昔から行っていると考えていることが，歴史をひもといてみると新しい起源であることはしばしば生じている。現在では，伝統とは「人々が古来から行ってきたと考えているものごと」として人類学分野では定着している。

いることで，自らの文化を意識するようになり，また，近い文化伝統を持った他者を見てその差異を認識すると同時に，他者のよい点を学ぶようになる。こうした中で，文化遺産を保持する気持ちを新たにし，新しい文化創造のエネルギーを注入すると同時に，太平洋人としての一体感をつちかうというのがこの芸術祭の目的である。

2.　背景

太平洋芸術祭の初回はフィジー大会（1972年開催）であり，それからほぼ 4 年に一度の開催で44年目に当たるのが今大会である。芸術祭はそれぞれに太平洋島嶼国家ないし地域が順番で開催することとなっているが，その全体を統括しているのが，各国の芸術関係の代表者が集まる太平洋芸術会議（Pacific Art Council）である。一方その仕掛け人というか，指導をし

図 1　太平洋諸島文化協議会加盟国・地域一覧（内堀・山本 2016: 208）



ているのが，太平洋共同体（SPC, (Secretariat for) the Pacific Community）である。

SPCは，第二次大戦後に戦争の爪痕の残る植民地太平洋の健全な発展と自立を支援するために，この地域の宗主国であるイギリス，フランス，オーストラリア，ニュージーランド，オランダ，アメリカの6カ国によって，当初は南太平洋委員会（SPC, South Pacific Commission）という名で設立された。オランダとイギリスが脱退しているが，1962年の西サモアをはじめ，独立した太平洋新興国家が続々と加盟して，現在は22の太平洋島嶼国家と地域がこれに含まれる。ちなみにそれら独立国家は，フィジー，キリバス，マーシャル諸島，ミクロネシア連邦，ナウル，パラオ，パプアニューギニア，サモア独立国，ソロモン諸島，トンガ，ツバル，ヴァヌアツである。ニュージーランドと自由連合の関係にあるクック諸島とニウエ[4]，自治領のトケラウ，アメリカのコモンウェルスである北マリアナ諸島，非編入領土として自治を行うグアム，アメリカ領サモア，また，フランスの海外県であるフランス領ポリネシアと海外準県のワリス・フツナ，海外領土であるニューカレドニア，イギリスの海外領土であるピトケアン諸島が参加している。コモンウェルスは自由連合よりも従属性が高いが，属領よりは自治権が大きい。一方，北太平洋からの加盟が増加した1997年には，南太平洋委員会から太平洋共同体へと名称を変更したが，SPCの略称は保持したまま現在に至っている。

SPCはかつての宗主国が，独立しつつある植民地を指導する，という性格が強かったのであるが，その性格はかなりの諸島が独立した現在でもそれら新興島嶼国家を指導する形でまだ残っているといえる。また，太平洋芸術会議を開催しようにも，各国の代表は旅費の工面もできない場合が多いので，SPCの力は未だ強く存在している。

4）この二国はニュージーランドに国防と外交を預けている。ちなみに，マーシャル諸島，ミクロネシア連邦，パラオはアメリカとの自由連合の関係にあるが，国防と安全保障以外はすべて自分たちで行っているので独立国の中に入れた。

太平洋芸術祭は開始当時，植民地からの独立や自治権確立を勝ち取りつつある新興国家の文化遺産を保持し，新たにアイデンティティを高める目的で開催されるようになったのであるが，その目的は現在でも重視されている。その延長上で，ハワイやラパヌイ（別名イースター島，チリの一部），ノーフォーク島[5] など国家の一部も芸術祭には参加している。

台湾が参加するようになったのは，2004年のパラオ大会からである。台湾原住民はオーストロネシア語族で，その意味で太平洋芸術祭への参加を求めるようになり[6]，現在ではオブザーバー参加を行っている。また2004年には，小笠原諸島の有志が南洋踊りを演じるためにオブザーバー参加を行ったが，これはその後諸々の事情があり中断している。小笠原諸島の一部住民は，ミクロネシアからの漂着民の血を引いており，その関係で参加を求めた。

太平洋芸術祭の開催地と年度を以下にリストとして示しておく。

回数	年度	国・地域	都市
第1回	1972	フィジー	スヴァ
第2回	1976	ニュージーランド	ロトルア
第3回	1980	パプアニューギニア	ポートモレスビー
第4回	1985	フランス領ポリネシア	パペーテ
第5回	1988	オーストラリア	タウンズヴィル
第6回	1992	クック諸島	アヴァルア
第7回	1996	西サモア（現サモア独立国）	アピア
第8回	2000	ニューカレドニア	ヌーメア

5）オーストラリア東部の海洋に位置する島で，海外領土となっている。無人島になったあと，人口過密となったピトケアン諸島から19世紀半ばに入植が行われた。

6）台湾は，中華人民共和国とは異なる点を強調することに努めており，原住民（先住民）がオーストロネシア語族であることから，太平洋諸島とのつながりを強調している。先住民アーティストの活動が活発化している上，先住民アートの研究もこの流れで盛んに行われるようになっている。

第９回	2004	パラオ	コロール
第10回	2008	アメリカ領サモア	パゴパゴ
第11回	2012	ソロモン諸島	ホニアラ
第12回	2016	グアム	ハガニャ

オセアニア地域の特徴は，旧宗主国のオーストラリア，ニュージーランドを除けば，独立国といえども，いずれも人口が数万人から数十万人程度の極小国家であるということである。例外はパプアニューギニアで，706万（2011年）の人口を抱えるが，その次に人口が多いのは，フィジーで83万（2007年）である。独立国として最も少ないのはナウルで１万（2011年），地域で最小はなんとピトケアン諸島[7]の57（2007年）である[8]。

また，国連信託統治委員会は，植民地を無くし，独立を推進するために，独自の聞き取り調査などをして，独立すべき地域をリスト化し，セミナーなどを開催して，独立に向けての作業の促進を行っているが，オセアニアでこのリストに上がっているのは，アメリカ領サモア，グアム，ニューカレドニア，フランス領ポリネシア，ピトケアン諸島，トケラウとなっている（UN official page）。

それら地域ではそれぞれに異なる事情を抱えている。独立運動が存在しているのは，グアム，ニューカレドニア，フランス領ポリネシアである。グアムの住民はもともとチャモロと呼ばれるオーストロネシア語族であるが，基地開発，観光開発を契機としてここは多文化社会に変容した上，基地問題など多くの問題を抱える（後述）。後二者はいずれもフランスの海外準県，海外領土であるが，フランスはこれまでもなかなか旧植民地の独立を認めない方針が強く，植民地であっても，長い歴史の中でそれらの地域

7）ピトケアン諸島の人口は，1789年のバウンティ号の反乱の首謀者たちとタヒチ人女性との間に生まれた子孫である。一時人口が増えすぎて，オーストラリアのノーフォーク島に移住したが，現在では移民などにより，人口減少に悩んでいる。

8）人口データはいずれも，SPCのウェブより。

が既にフランスの一部となっているということを強く主張している。ニューカレドニアの場合，フランスからの移住者が先住民カナクの人口を凌駕するまでに至っているが，1970年代に始まった独立運動は1980年代には武力闘争に代わり，1984年に開催が予定されていた太平洋芸術祭が中止されたほどであった。現在では協定が結ばれ，2014年以降に住民投票で独立するかどうかを決着することとなっている。フランス領ポリネシアにも独立運動が存在したが，現在では沈静化している。

アメリカ領サモアについて，かつて小論を書いたことがあるが，ここでは独立を標榜する運動は存在していない。自治政府や政治家の主張するところでは，アメリカに主権を委譲して以来，アメリカの傘下で平和に暮らしてきたし，自治等の権利は与えられ，アメリカ統治について全く不満はない，ということであった。ただし，パラオのようにアメリカと自由連合協定を結び，独立するが国防と安全保障はアメリカに預け，アメリカからは援助をもらうという方法を希求する政治リーダーも存在する（Yamamoto 2011）。

ピトケアン諸島を独立させるという議論は，現在の人口を見る限り相当難しいと思われるが，最初からこのリストに上がってしまったので，その地位が継続しているようである（The Economist 2013.5.25）。トケラウの場合も，過去2回の住民投票の結果，独立は否定されている。トケラウ自治政府のある役人と話したところでは，人口が少なすぎて国家をなすのは無理である，とのことである（personal communication）。ちなみにトケラウ諸島の人口は1400であるのに対し，ニュージーランド在住のトケラウ人はその5倍にも上る。

さて，自決権の行使という意味での国民国家の建設に関して，最後の地域といえるオセアニアであるが，各地域の完全なる独立が可能かというと，それにも疑問符がつきそうな感じであるが，むしろ文化によるアイデンティティの追求という形で，政治的自立に先行して行われてきたのが太平洋芸術祭ということもできるかもしれない。それは，政治的自立を促すもの

であっただろうが，最後まで貫徹する独立を希求することができるかには疑問の余地がある。また，すでに独立している極小国家も1980年代から指摘されてきたように，MIRAB（Migration, Remittances, Aid, Bureaucracy），すなわち海外移民を送り出して得る送金，海外援助，政府雇用による経済活性化によって成り立つ国家であることは，現在もあまり変わっていない。つまり，多くの国がたとえ政治的独立はあっても経済的独立が難しいという問題を抱えている。

筆者は，1996年にたまたま，当時の西サモア，現在のサモア独立国での調査の折に，第８回太平洋芸術祭を目の当たりにして，大変興味を持ち，その後第９回太平洋芸術祭を調査する機会を得た[9]。その後，2004年，2008年と短い時間であったが芸術祭を訪れている。2012年だけは，機会を逸してしまったが，その後ニュージーランドの太平洋系アーティストの研究を始めたために，2016年に再び芸術祭を調査する機会を得ることができた。

期日はすでに書いた通り，2016年５月22日から６月４日の２週間，主催者はグアム政府[10]である。学期中の２週間の調査は無理であるため，20日夕方に到着し，31日午後の便で帰国することとした。21日午前中はちょうど同時開催されていた太平洋史学会に寄って旧交を温めた後，一緒に来ていた同僚（天理大の安井眞奈美氏）の紹介により，グアム大名誉教授のヒロ・クラシナ教授夫妻が迎えに来てくれ，同僚とともに車に乗せていただき，情報収集に努めた。調査許可の代わりとなるプレスの登録をすでに行ってきていたので，まずはそのIDを受け取りたかったのであるが，クラシナ教授によれば，大会本部は大変忙しく，それどころではないようである。

クラシナ教授夫妻に連れられ，彼らが親交のあるクック諸島の代表を訪

9）「太平洋島嶼国における芸術とアイデンティティ-太平洋芸術祭を焦点として-」（海外科研基盤B，課題番号11691035，代表者山本真鳥）成果が，Yamamoto 2006である。また和文の科研費報告書（山本　2001）も作成している。

10）グアムは2010年現在，先住民のチャモロ人は人口の37%を占め，最大人口のエスニック集団ではあるが，過半ではない。しかし，太平洋芸術祭は先住民であるチャモロ文化を見せる祭典とされている。

問した。彼らはハガニャ近くの高校に宿舎を構え，準備をしたり，昼寝をしたりして時を過ごしていた。クック諸島の代表は，ダンスも呼び物であるが，太鼓の演奏が見事であり50〜80センチ大のスリットゴング[11]（割れ目太鼓）を横置きにして支柱の上に乗せ叩くと，太鼓は甲高い元気のよい音がした。共演のときには革張りの太鼓も含めて，複数個を皆で叩くので，大変景気のよい音がそこら中に響く。

そのほかに，ティバエバエの作家や椰子の葉でバスケットや敷物を作ったりする作家がいた。ティバエバエとは，太平洋に19世紀初め頃やってきた宣教師の妻たちが，クック諸島の女性たちに伝えたパッチワークのことで，もともとはベッドカバーなどを作ったが，現在クック諸島では，贈答品として用いられることが多く，結婚の際に花嫁が持参するものとなっている。クック独自のデザインを形成し，芸術品として商品化もしている。ハワイの工芸品として，ハワイアン・キルトが有名であるが，これと似ている。

また，クック諸島のテレビ局は民営化しており，その経営責任者の１人である女性が，記者とカメラマンを兼ねてきていた。スタッフ不足なので，プロを送り込むことができず，自分がきたとのこと。記者とカメラマンも兼ねて，１人で取材もこなすという。別な女性は，ビジネス・セクターから来て，どのようなビジネスチャンスがあるか視察する予定とのことである。この女性は自費の別行動で，この代表団の宿舎ではなくホテルに宿泊している。後に，フェスティバル・ビレッジ（土産物売り場）で姿を見かけた。

また，サモア独立国の代表団もここの高校に同宿していて，男性ダンサーの数人が１階の体育館でファアタウパチ（スラップダンス）の練習をしていた。ファアタウパチというのは，体のあちこちを叩きながら踊るアクロバティックな男性だけのダンスである。

11）丸太をくり抜いた丸木船のような形をしていて，バチで叩くと空洞部分が共鳴して大きな音を発する太鼓である。太平洋に広く分布している。

その後退散した。

3.　５月22日初日の行事

次の日，22日の早朝にカヌー・ウェルカムの儀式があるというので，朝４時頃に起きて，安井氏に加えて総勢４名の研究者，１名の学生でハガニャの海岸まで行った。すでに大勢の人が見物に訪れており，たちまち撮影に必要な場所の取り合いが始まった。

最初はまだ暗く，やがてうっすら夜が明けてくる中を，小型の帆なし６人乗りアウトリガーカヌーがそこら中をこぎ回っているのが見える。その後，帆のある15人位乗船している外洋航行の可能な大型のアウトリガーカヌーが出現する。グアムの島の向こう側からやってきたカヌーであるようだ。昔は道があって無いようなものだったから，島の裏側からは陸路ではなくカヌーで沿岸沿いに来る方がよほど楽だった。浜辺には，グアムのダンス・グループが正装していて，歓迎の歌を歌い，浜辺で出迎える人が，歓迎の印の木箱入り食料を渡す。後で同種の箱の中身を見ると，椰子の実，パンの実，バナナ，インディアンアップルなどが入っていた。一方で，訪問者の方は民芸品のようなお土産を持参している。このようなカヌーが何隻も何隻もやってきて，交換を行っては，歓迎の歌に踊りが繰り返された。中には北マリアナ諸島よりやってきたカヌーも含まれていた。サモアやニューカレドニアで行われた時には，かなり大きなクック諸島やサモアのカヌーがやって来ていたのと比べると，今回来ているミクロネシアのカヌーは小型である。国立民族学博物館所蔵のチチュメニ号[12]よりも小さいという印象を受けた。しかし，パラオから来たダブルカヌーだけは，長期の航海に耐えるような大きなものだった。

12）伝統的航海の手法を伝承しているサタワル島で製造され，外洋を沖縄国際海洋博覧会（1975年7月よりほぼ半年間開催）の行われた沖縄本島まで航海してやってきたカヌー。現在は博物館に展示されている。

カヌー・ウェルカムの儀式の終了後，大会事務所に行って，プレスIDを受け取った。いったん宿に帰って午後の開会式に備える。

午後5時開始の開会式のために早めに行って場所取りをする。アメリカ国歌斉唱によって開始するところは，やはりアメリカの属領であることを感じる。野球場の外野席中央に舞台がしつらえられ，内野席の中央が貴賓席になり，その両脇に観客席がしつらえられている。外野席は階段状になっていて，こちらも観客が座ることができる。グアム大学の学生の歌などが終了後，代表団の紹介が始まる。それぞれの代表団は，舞台から降りてきて，貴賓席の正面，舞台の前で独自のダンスのさわりを披露し，リーダーがお土産をグアム知事夫妻に渡す。ただし，開会式の日が安息日であることを気にして，ダンスではなく賛美歌を披露したトンガや，色とりどりの衣装を披露しただけのツバルなどもある。

最初は，前回開催のソロモン諸島である。その後，SPCの代表者や各国の国家元首などの紹介がある。ソロモン諸島代表団はきわめて大きな集団であったが，ご自慢の竹製パンパイプのオーケストラ[13]を先頭に，いくつものエスニック集団[14]が続いてダンスを披露していく。続いて，アメリカ領サモア，オーストラリア（アボリジニよりもトーレス諸島人の方がめだっていた），クック諸島，ラパヌイ（イースター島），ミクロネシア連邦，フィジー，フランス領ポリネシア，ハワイ，キリバス[15]，マーシャル諸島，ナウル[16]，ニューカレドニア，ニュージーランド，ノーフォーク島，北マリアナ諸島，パラオ，パプアニューギニア，サモア独立国，トケラウ，トンガ，ツバル，ワリスとフツナ，そしてオブザーバー参加の台湾原住民。

13）長さの違う竹を並べて異なる音程を出す楽器がパンパイプである。大きさの違うパンパイプを何種類も用いて合奏するのが，ソロモン諸島のオーケストラの特徴。マライタ島アレアレ族の発祥である。

14）メラネシア社会の常として，小さな異なる言語集団が多数存在している。国内には，ポリネシア系，ミクロネシア系の集団も存在する。

15）開会式には間に合わなかったが，司会者は来週に参加予定と告げた。

16）キリバス同様開会式に間に合わなかったが，来るかどうかも定かではない様子であった。ただし，後にフェスティバル・ビレッジには来ていた。

写真１　グアム代表団の入場と演技

最後に，開催国であるグアムがいくつもの異なる集団をなして登場した。

このあとに，SPCを代表して，社会開発プログラムのディレクター，クイニセラニ・トエルペ・タゴ氏が挨拶の演説をした。SPCの簡単な歴史とグアムが開催国になってから３年間をかけて十分準備を重ねてきたことを強調した。この大会は，それぞれの国や地域がもつ芸術や慣習，伝統を互いに披露して知り合う場であり，これによって伝統文化の保持が重要であることを実感することができる。この営みを通じて互いの違いと共通性を認識しつつ，仲間として親しみ，同じ太平洋人であることを確認するとともに，この地域の持続可能な開発に取り組む力を養う場として役立ててほしい。SPCはこの地域の健全な発展のために活動してきた歴史をもち，この芸術祭もSPCの活動の一環として重視されている。芸術祭の２週間を是非とも意義あるものにしよう，というのが要旨であった。

ここまでが第一部で，この後第二部として開催国グアムの代表団が用意

したダンスや劇が続いた。これはいつも恒例となっている。それぞれの国が十分準備して，それぞれの文化に特徴的なダンスや劇を配置して演技する。グアムの場合には，若い人々の積極的な参加がかなり目立っており，劇であるが，伝統的歌やダンスをふんだんに盛り込んだオペラというかミュージカルのような劇となっていた。このグアムが用意した部分は相当な長丁場で，すべて終了した後，10時を回っていた。

4.　23日以降のプログラム

4.1　パフォーミング・アーツ会場

太平洋芸術祭のもっとも目立つ催しは，各国代表団の歌とダンスである。メインステージは開会式と同じ，野球のスタジアム，パセオであった。この野球場はファッションショーの舞台としても用いられたし，建物部分にプレスのコンピュータ・ルームやリエゾンオフィス，警備本部などが置かれていた。また，フェスティバル・ビレッジ（後述）も近接領域に置かれていた。スタジアムのあるハガニャ地区はシビック・センターのようなところで，政府庁舎と共に博物館，図書館，公園などがあり，さまざまな催しの会場として用いられ，市民が見物に来るための駐車場と，駐車場と会場を結ぶバス輸送のサービスも用意されていたし，遠方の会場とを結ぶバス（スクールバスが用いられていた）もここを発着場としていた。

伝統的な歌とダンスのためには，他の会場も用意されていた。グアムは北東から南西に広がる長い島であり，ハガニャはその中央の北西に向いた海岸沿いにあるが，その南の西に向いた海岸沿いに用意されたのがサガン・ビシタ会場であり，ハガニャから北東の方角に向かったところに用意されたのが，農業協同組合会場であった。それぞれハガニャからはバスで１時間程度の距離にある。また，後述する博物館の裏庭でも歌とダンスの公演が行われた。

図２　グアム島芸術祭地図（12th Festival of Pacific Arts 2016）

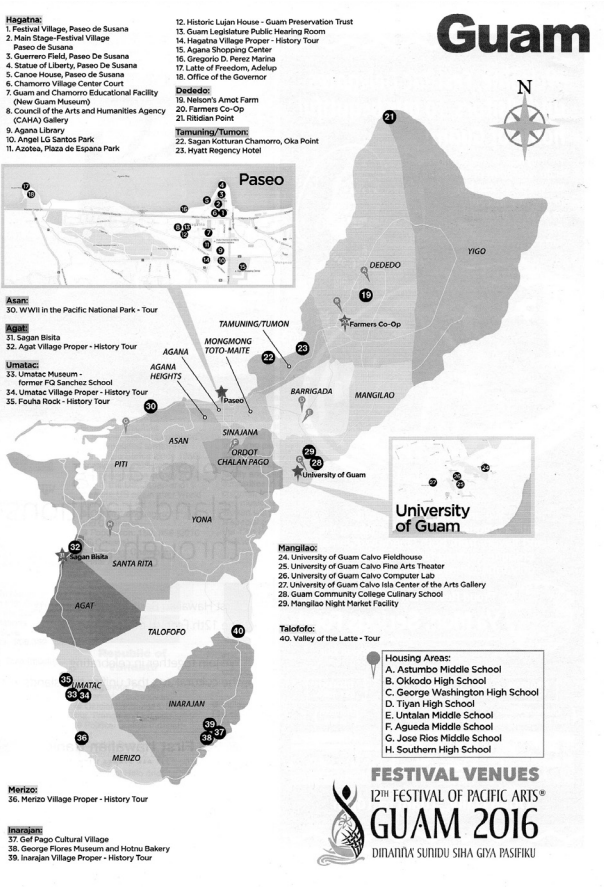


写真２　サモア独立国代表団（教員ダンスグループ）の演技

4.2　フェスティバル・ビレッジ会場

フェスティバル・ビレッジは様々な工芸品や土産品を売る会場である。それぞれの国がひとつずつ屋根だけの小屋をあてがわれ，ここで持参した作品や土産物を売る。天然素材で編んだバッグや敷物，貝殻のアクセサリー，タパ（樹皮布）の作品，アイランド・プリントのドレスなどが定番であるが，それぞれの国の特徴がある。タパのデザイン，色彩やパターンな

写真３　フェスティバル・ビレッジ内トンガのブース

どが異なるのである。有名なところとしては，マーシャル諸島のパンダナスのアクセサリー，クック諸島の帽子やティバエバエ，フランス領ポリネシアの貝のアクセサリー，パプアニューギニアのネットバッグ，グアムの貝殻細工などがある。ここは大勢の人が往来する場でもあり，小さいながらもポピュラーミュージックの実演舞台もあり，バンド演奏が行われていた。見る機会は得られなかったが，ニューカレドニアのラップダンサーの少年グループResurrectionの公演も行われたとのことである。

バンド演奏に関しては，フェスティバル・ビレッジと大通りを挟んで向かい側に位置したレストランの庭に用意された会場でも行われた。連日の賑わいである。

4.3　博物館会場

この芸術祭をよい機会として，ハガニャにはグアム博物館が建設されることとなっていた。これは完成すれば 3 階建ての建築であり，講堂などの集会施設や野外の舞台を備えた建築[17] である。さまざまな事情で建築は終了していなかったが，すでに完成している 1 階部分を使って，絵画や彫刻，インスタレーションなどの展示が行われた。博物館展示のオープニングセレモニーが25日（水）の夕刻に開催された。グアムのダンス・グループに加えて，フィジーの代表団もダンスを披露して，政治家のスピーチが行わ

写真４　ビジュアル・アーツの展示オープニング、パラオ代表団団長と博物館館長

17）The Antonio “Tony” Palomo Guam Museum and Chamorro Educational Facility in Hagåtña という正式名称で2016年11月4日に開館式が行われた（The Pacific Daily News 2016.11.4）。

れた後，展示会場が開いて，観客は中での見学を楽しんだ。太平洋諸国のアーティストの作品群である。グアムのアーティストのものが最も多く，中には海外にも活動の場は広げている国際的アーティストの作品がある一方，そこまで売れずに日曜画家のように活動している作家に至るまでいる。太平洋諸国のアーティストの場合，神話や昔話を題材とした作品や伝統的な暮らしを描く作品が多い一方で，植民地主義をあからさまに批判するようなものや，現代社会を活写するような絵，そして抽象画もあった。ニュージーランドの作家の作品の中に，ニュージーランド在住のサモア人アーティスト，イオアネ・イオアネの作品――造形にコンピュータでインターラクティブな光を当てたインスタレーション――もあった。ただし，ニュージーランド在住の太平洋系現代美術作家は数多くいるが，今回の参加は彼だけであった。マオリ系の作家の中にはビデオ・インスタレーションの参加もあった。また，フィジーのレッド・ウェーブ系のアーティストの参加もあった。レッド・ウェーブはフィジーにある南太平洋大学オセアニア・アートセンターで育ったオセアニアのアート運動である。多くのアーティストが単に展示するアートを提供するだけでなく，本人がアートのそばにいて，見物客との対話に参加しているのは大変よかった。アーティスト同士ももちろん交流している。

またこの博物館の講堂では，映画が上映されていた。すべての作品を見たわけではないが，今回の催しで最も興味をもつことができた。伝統的な生活や現代の人々の暮らしを描いたものなどもあるが，なかでさりげなく辛口で描かれているのが植民地主義や，環境問題である。彼ら自身のこれらの問題関心について改めて考えを巡らせることとなった。

マーシャル諸島には欧米人の夫とマーシャル出身の妻が営み，マーシャル諸島人が主演するフィルム製作工房Microwaveが存在している。彼らの製作によるAinikien Jidjid ilo Boñ（The Sound of Crickets at Night（2012）という作品は，祖父と孫の話である。祖父がビキニの水爆実験の被害にあって，難民としてマジュロ（首都）で補償金を頼りに暮らしているが，時々

その後遺症が表れる。祖父の娘夫妻（孫にとっての両親）は険悪な仲となって離婚し海外移民するが孫を祖父の面倒を見るべく置いていく。その絶望的な状況を救うべく祖父はビキニ島の神に願いをかける。Jilel: The Calling of the Shell（2014）は魔術的な貝殻の話であるが，これを巡ってドタバタが繰り返された後，祖母からこの貝殻を託された少女はこれ以上の地球の温暖化を防ぐためにこの貝殻を使おうと決心する。日常の暮らしの描写の中には，海に洗われる墓石や，堤防を乗り越える荒波の映像も出てくる。それに加えて，海外移民でばらばらになる家族，仕事がない島の暮らし，その一方でグローバルな商品をそろえた町の商店などが描かれる。またマオリの人々が奪われた土地の返還を巡って戦うフィルム（かなり古いものであることが判明）も上映された。ラパヌイの映画では，モアイの伝統を繋げていこうとする老人が孫を連れて大英博物館を訪れるところが描かれていたりする。博物館では標本の保護を目的として，標本を見せるために結構高い料金を請求される，といった場面が出てくる[18]。グアムのフィルムでは，日本時代の抑圧が描かれていて，また一方でアメリカ統治に対しても批判的な描写が目立っていた。同じくグアムで製作された「タレント・タウン」というフィルムではグアム・アイデンティティを追求する若者たち，アーティストたちの姿が描かれている。

4.4　グアム大学会場

グアム大学は，ハガニャから山側に抜けて反対側の海岸に近い場所にある。バスで1時間近くかかる。グアム大学は舞台芸術，劇やミュージカルなどを主として演じる会場やセミナーの会場も提供した。私が見ることのできたのは27日午後のプログラムで，ソロモン諸島のグループとニューカレドニアのグループだった。前者はNgellaというグループで，同名の島の

18）2016年3月のオークランド芸術祭で，「あるサモア野蛮人の研究」と題した展示を行ったアーティスト，ユキ・キハラも同様に，先祖のデータを請求した際，大英博物館に高額の料金を請求されたことを述べている。

写真５　ソロモン代表団による演劇のひとコマ

出身らしい。赤ちゃんをあやしたり，子どもが遊んだりする場面が多く出てきて，歌やダンスで構成されている。おそらく日常風景を描いたものであると思われた。後者のグループはソロモンのものとは対照的にほとんど台詞だけで構成された演劇集団であった。話す言葉がフランス語と現地語だけだったので見ている間はほとんど内容理解ができなかった。後で解説プリントを読んだ限りでは，ロワ・ソー劇団，ニューカレドニアは28の異なる言語があるが，それらを横断して公演を行っているマルチエスニックの劇団である。演目はACANEM。同名の見えない国の王が，カディカとワロリワネという２人の妖精を，人間を救うために見えるこの世に使わす。しかし人間は，破壊，汚染，殺人等々の問題を抱えていて，それを矯正するのには多くの困難が伴う，というあらすじである。

他に，グアムからの複数の劇団，ニュージーランド，サモア，オースト

ラリア，トンガの劇団の参加があった。サモアのは「サモアと呼ばれる家族」という演目であり，シリガ・サニ・ムリアウマセアリイに率いられたガファ（系譜）という名のロンドンで活動をしているアーティスト集団である。サニはオーストラリアで教育を受けたテノールのオペラ歌手であり，演劇活動・舞台監督も行っている。日時が合わず，残念ながら見ることができなかったが，この演目はイイガ・ピサというサモアの首長の事績にからむストーリー展開となっている。サニの曾祖父であるピサは，反植民地運動によりドイツにとらえられ，1909年にサイパン島に仲間とともに島流しにされたが，ミクロネシアが日本軍に占領されるや，単独で小さなアウトリガーカヌーに乗って脱出し，グアムにたどり着く。ここで英語をならい，アメリカ軍に加わって働き，やがてアメリカ領サモアを経由して故郷に帰還を果たす。その後にニュージーランドの植民地政府の役人の下で働いた（McKay 1968: 22-36）。

グアム大学でのセミナーも様々なテーマで行われた。それぞれの国の政治や経済の問題もあれば，考古学などの歴史文化をテーマとしたものもあった。１回しか参加の機会がなかったが，私の参加したセミナーは，グアムの将来の地位についての議論が交わされていた。第二次大戦後アメリカに統治されていた合衆国信託統治領は，1970年代に独立準備が行われ，それぞれの地域で将来の政治形態について議論が交わされた。その結果，北マリアナ諸島はアメリカのコモンウェルスとなり，ヤップ，チュック，ポーンペイは，コスラエとともにそれぞれが州となってアメリカの自由連合であるミクロネシア連邦となった。さらにマーシャル諸島とパラオはそれぞれ別の自由連合の独立国となった。グアムの政治リーダー，ホセ・ガリド氏は，これが目指すところと考えているようであるが，パラオの高位首長で検事でもあるローマン・バダール氏，ニュージーランドの自由連合であるクック諸島の検事を務めるマーク・ショート氏，カリブ出身で国連のアドバイザーなどを務めた経験のあるカーライル•コービン博士を迎えて，様々な制度上の違いについて討議を行った。関心は，独立後もアメリカに

自由に行き来できるかどうか，教育制度，医療制度はどうなるか，市民権はどうなるか等の問題である。全般的にニュージーランドとクック諸島との間の自由連合は寛容であると見受けられるが，そこは交渉になるだろうということである。また，島という条件下でどのように経済開発をすべきかも難しい。さらに，グアムは基地問題が大きく人々の暮らしにかかわっているのであるが，これは今後交渉の大きなテーマとなるに違いないといった議論がなされた。基地問題は，グアムの広大な土地を占拠しているという意味で大きな抑圧の原因となっているが，同時に大きな雇用機会を提供もしているので，そう簡単ではない。

4.5　その他の会場

チャモロ（グアムの先住民）の文化センター等でも活動が行われた。そのひとつ，サガン・コツラン・チャモロは，観光ホテル街のはずれの高台にある文化施設であるが，ここでは，薬草の展示やワークショップ，グアムの画家マーク・デリソラが，製作しているところを見せてくれ，また見学者と気楽に話をしてくれるアトリエがしつらえられていた。またチャモロの伝統的道具類を展示している部屋もあった。さらに，野外には，いくつかのテントが張ってあり，タトゥーの実演が行われていた。タトゥーは他の島々では宣教師による禁止などにより途絶える一方，サモアでは伝統が続いていた。ここを中心にポリネシア諸国でタトゥーのリバイバルが生じ，今では，世界中で流行している。ただし，伝統的器具を用いてのポリネシアのタトゥーを行っているのはサモアの入墨師だけで，あとは電気のタトゥー・マシンを使っている。サモアでは伝統的器具を使ってタトゥーをするのが，特定の家系の人々とそれに弟子入りした者だけに限られているという。

ハガニャの図書館でも出版物を巡るワークショップが開催されたり，本の展示が行われたりした。また生け花にも似た，花を飾る展示や，写真展示，各国料理のサービスなどあらゆる活動が行われていて，筆者がすべて

に足を運ぶことは不可能であった。

5. 開催国グアムと先住民運動

芸術祭開催を後押しするSPCの希望するところは，それぞれの国で伝統文化に対する意識と誇りが高まることと，そうした活動を通じて各国が互いの文化を知り，違いと似たところを意識して太平洋共同体の仲間であることを実感することであったが，このような試みが実際に成功しているケースは，第 7 回太平洋芸術祭開催のクック諸島，また第 8 回太平洋芸術祭開催のサモア独立国（当時西サモア）では確かめられている。クック諸島の芸術祭の後もしばしば現地を観察する機会を得た棚橋は，芸術祭の後に人々の間に高まった伝統文化見直しの意識が外洋航海用のカヌー建造に向いていく様子を描いている（棚橋 1997）。クック諸島での芸術祭には，ハワイ人たちの先住民運動の先駆となったホークーレア号が芸術祭期間中に訪問したのであるが，この外洋カヌーがハワイから遠い道のりを航海してきたことは人々にとってまさに衝撃であった。最初に建造されたカヌーはテ・アウ・オ・トンガ号であり，このカヌーは1996年に西サモア（当時）で開催された太平洋芸術祭を公式訪問した。その後も複数のカヌーが建造されている。

同じことはサモアでも起こり，現在外洋を航海するカヌーが建造されていて，クルーの訓練も行われている。しかし，サモアではカヌー建造以外にもアート分野での活動も活発化した。とりわけ，ダンスに対する意識は強くなった。それと同時に，他の土地のダンスの動きなどを取り入れたダンスが見られたり，伝統的なダンスの学校が作られたり，新しいダンスのスタイルを確立することに熱を入れたりなどの動きを観察することができた。もっとも，新しいダンスの学校は十分生徒が集まらず閉校になったし，よその土地のダンスの動作はやがて忘れられてしまった。

太平洋諸国は極小国であるが故に，役人や政治リーダー等エリートの国

際交流は大変頻繁に行われている。代表者が出ていく場の多さに引きかえ，代表できる人の数が少ないからである。彼らの海外経験はかなりのものに上るが，その一方で，一般人にはそうした機会はあまりない。ダンス・グループの参加者たちのような一般人にとって，サモア移民の行き先を除いてどれだけ海外経験や国際交流があるかというとそこには限界があるだろう。その意味で，役人の交流とは違う一般人の交流として大きな役割を果たしているといってよい。また開催国の人々はテレビ等のメディアがあるから，実際に交流しないまでも欧米文化にはそれなりに親しんでいる。しかし，隣国の島嶼社会については情報があまりない。それぞれの島嶼社会に住む人々もこのような大会があってはじめてその機会が得られるのである。グアムの場合にも，結構大勢のグアムの人々が，高等学校・大学が休みに入った時期であったということもあるだろうか，見物に訪れていた。とりわけ，海外のグループは数が知れているが，グアムはパフォーミング・アーツだけでも250人以上が代表団に参加している。近隣の人々や親族がその中にいる可能性は高いから，学芸会状態であることは間違いがないが，他の国の人々の演目にも大勢が詰めかけていた[19]。

さてそのように，もともと芸術祭の開催が伝統文化に対する意識を高めることはおおいにあり得ることであるが，グアムの場合いかがであろう。グアムの場合には，芸術祭の前段階で伝統文化の重視，人々のアイデンティティ強化がすでに始まっているということが強く感じられた。グアムが太平洋芸術祭に参加するようになったのは，1985年のパペーテ大会からである。私が最初にグアムの代表団を見たのは1996年のサモア大会からであるが，正直いってあまりそのダンスに感銘を受けたことは無かった。安井は2000年のニューカレドニア大会への準備状況を確かめる調査をしてい

19）太平洋諸島外からの見物客は，グアムが観光地であることを考えればあまり多くなかったように思える。ひとつには，グアムに来る観光客は日本人が57%，韓国人が28%である（2015）（Guam Visitors Bureau 2015: 42）が，日本人のグアム観光情報では伝統文化についてあまりこれまで言及が無かった。太平洋芸術祭に関する情報も日本ではほとんど流れていなかったのである。

るが，そこで人々はチャモロとは何か，といった議論を始めていて，チャモロ文化についてもあまりきちんとしたコンセンサスのないまま，代表を送り込むということをしている様子を描写している（安井 2001: 53-57）。しかし，今回のダンスは相当練習したことを感じさせる出来映えであったのみならず，チャモロとは何かといった問いかけのフィルムが製作されていたりして，かなりのアイデンティティ意識を感じさせるものであった。

それには，グアムの抱えている政治問題があると思われる。グアムは1898年に米西戦争でスペインがアメリカに敗戦した結果として，アメリカに譲渡されたものである。それまでスペインはマリアナ諸島全体とフィリピンを領有していたが，フィリピンとグアムを合わせてアメリカに譲渡し，北マリアナ諸島（マリアナ諸島のグアムを除く部分）をドイツ政府に売却した。当時，グアムは未開発の田舎の島で，これがいったい何の役に立つのだ，とアメリカ人関係者は自問した。

しかしそれは，後になってアメリカにとって大変役に立つ場所にあることが判明する。アメリカの世界の中での役割が増大する一方で，極東アジアやソ連（ロシア）に睨みを効かせる戦略的重要性を担う土地となったのである。第二次大戦中は日本軍に占領されたが，取り返してからここは日本攻略の拠点となった。現在グアムには基地が作られ，かなりの土地が軍用地となっている。

グアムの人口は第二次大戦前，ほとんどがチャモロ人であったが，フィリピンやカロリン諸島からの労働力移住，合衆国本土からの移住等があり，チャモロは2010年現在全体の37%程度を占めるのみとなっている。アメリカの教育により，英語のみを教える時代が長く，ハワイ語ほどではないがチャモロ語を失ってしまったチャモロ人も増えつつあった。70年代になるとチャモロ語の教育が始まる。アメリカ本土での先住民運動はチャモロ意識の芽生えに火をつけたとはいえ，その意識改革は他の先住民運動から比べたら，やや遅咲きの感がある。映画では「グアム•チャモロの母となる」という短編映画があった。チャモロの女性たちにチャモロの母とはどのよ

うな存在かということを尋ねるものであるが，その答えはどうやらジェンダー役割分担を強調する社会に共通するような母親像であった。また，映画「タレント・タウン」でもユニークな人のいる土地，才能に恵まれた土地グアム，を強調すると，そこにチャモロ的なものがあるか，という疑問が付されることになる。映画では美術界・音楽界で世界に注目されるチャモロを取り上げている。彼らが才能豊かであることは間違いないが，チャモロであるが故にユニークであるかどうかは疑問である。というように，未だチャモロ・アイデンティティの追究は道半ばであるという感想をもった。というのも，実はチャモロという集団自体，ハイブリッドな性格を持っているからである。スペイン時代にはフィリピンとの間に境界は無かったのでフィリピンに系譜をたどることのできる人も多いし，日本人の血を引く人もいる。戦後に流入した白人とのハーフも多い。チャモロ文化自体ハイブリッドなのである。しかしながら，チャモロ・ナショナリズムを研究してきた長島は，チャモロ・アイデンティティとはむしろ植民地経験を媒介として形成されてきたところが大きいという（長島 2015: 133-159）。

第 2 章で，グアムは国連の独立すべきリストの中に入っていることを説明しているが，本当に独立が実現できるかどうかは微妙である。アメリカ合衆国の非編入領土は，それぞれに制度が異なっているが，グアムの場合南太平洋にある非編入領土，アメリカ領サモアとその制度は似ている。大きく異なるのは，グアム島の場合市民権が与えられているところで，一方のアメリカ領サモアはアメリカ国民[20]という地位になっている。それ以外は自治政府が置かれ自治が行われており，アメリカ下院議会に投票権のない代表を送り込むことができる。大統領選挙には党代表を選出する選挙に参加できるが，実際の大統領選挙には投票権を持たない。しかし，アメリ

20）アメリカ本土へは自由に航行でき，５年を経ると市民権を得ることが可能となる。市民権を得ると居住地から大統領選挙に投票する権利をもつが，実際に手続きをする人は少ない。グアムの住民は，グアムにいると大統領選挙に投票できないが，本土に住んでいればすぐ可能である。

カ領サモアの海軍基地は第二次大戦終了のすぐ後に戦略的価値を無くしたということで撤廃されているのに対し，グアムは現在でも戦略的価値の非常に高い領土ということになる。

グアムはコモンウェルスになることを投票で決めて1988年に連邦議会に議案が提出されたが，長い検討期間を経た後の2003年に法案の核心部分について同意しないとの表明があり，拒否されている（長島2015: 197-201）。その後は，自由連合や，ハワイ，北マリアナとの連合を追究する活動が行われている。今回，グアム大学で自由連合についてのセミナーが開催されたように，新しい地位については模索中といえる。チャモロ・ナショナリズムの活動はコモンウェルスの道が途絶えた後も活発に行われている。芸術祭でのグアムの取り組みにその一端を見ることができるが，一方でチャモロには合衆国市民権が与えられているので，ハワイや本土に行くことについて障壁はなく，そのためにチャモロ人はある意味で拡散していく傾向にある。また，ミクロネシア連邦，本土，フィリピンからの移住者が増加して，グアム自体もマルチエスニック社会へと変貌を遂げている[21]。今後もグアムの動向には注目していきたい。

6.　結び

芸術祭に取り組むアーティストたちの一人一人が，政治がらみの意図を持っているわけではない。具体的には自分たちのアート活動を発表する場としてとらえている人がほとんどであろう。それぞれの先祖由来のアートや，自分たちの生活の中での営みとしてのアートもあれば，何か新しいアートを創造する場合もある。またアート活動は現代にあって，経済活動とも密接に結びついている。アーティストの暮らしはアートが売れて初めて成り立つのである。

21）法律上の脱植民地化登録簿の有権者資格は，「1950年グアム基本法の権限と制定によってアメリカ市民となった人びとおよびその子孫」とされている（長島 2015: 253）。

しかし，太平洋のアート活動が何らかのアイデンティティを付与されている場合――またこの地域のアーティストにはそれが切っても切り離せないものとなっているのが普通なのだが――それは何らかの政治性を帯びないとは限らない。その意味で，チャモロのアイデンティティにかかわるアート活動，アートの創造やその展示は，グアムの政治課題と無縁ではないだろう。この祭典は現在先住民中心の祭典となっているため，グアム代表団が用意したグアム・アートのショーケースに，この社会を構成するフィリピン人，ミクロネシア人，白人等の影はほとんど見えなかった。それはまたこの社会のあり方を歴然と示しているともいえる。

芸術祭のあり方は，それぞれの開催国の条件によりずいぶんと違ったものとなることは既に述べている（山本 2001: 23-24）が，グアムの場合もまさにグアムの政治状況がこの芸術祭のあり方に大きくかかわっていたということができる。

謝辞

この調査は，日本学術振興会科研費基盤C（「太平洋現代芸術の人類学的研究―ニュージーランド太平洋系住民のアート活動を中心に」課題番号:15K03058，代表者: 山本真鳥，2015-18）により可能となった。また過去の調査，海外科研B（「太平洋島嶼国における芸術とアイデンティティ―太平洋芸術祭を焦点として―」課題番号11691035，代表者山本真鳥）の成果も多いに活用している。また調査を許可してくれた，第12回太平洋芸術祭組織委員会にも記して感謝したい。

文献

12th Festival of Pacific Arts Guam (2016) *12th Festival of Pacific Arts Guam 2016.* Official Program.

Guam Visitors Bureau (2015) *Annual Report 2015.* (https://www.guamvisitorsbureau.com/research-and-reports/reports/annual-report) (2017/ 1 / 2)

Hobsbawm, Eric and Terrence Ranger (eds.) (1983) *Invention of Tradition.* Cambridge: Cambridge UP.

The Economist (May 25, 2013) The Pacific's Colonies End of Empire. (http://www.economist.com/news/asia/21578438-pressures-independence-are-alive-not-always-kicking-ends-empire) (2017.1.2)

Mckay, C.G.A (1968) *Samoana*. Wellington: A.H. & A.W. Reed.

Pacific Daily News (2016.11.4) Guam Museum unveils its first exhibition. (http://www.guampdn.com/story/news/2016/11/04/guam-museum-unveils-its-first-exhibition/93277610/)(2017.1.2)

SPC Population Statistics (http://prism.spc.int/regional-data-and-tools/population-statistics) (2017.1.1)

United Nations, United Nations and Decolonization, Non-Self-Governing Territories. (https://www.un.org/en/decolonization/nonselfgovterritories.shtml) (2017.1.1)

Yamamoto, Matori (ed.) (2006) *Art and Identity in the Pacific: Festival of Pacific Arts.* Osaka: Japan Center for Area Studies, National Museum of Ethnology.

Yamamoto, Matori (2011) Nationalism in Microstates: Realpolitik in the Two Samoas.『経済志林』78(3): 283-299.

内堀基光・山本真鳥編（2016）『人類文化の現在：人類学研究』東京：放送大学教育振興会。

棚橋訓（1997）「MIRAB社会における文化の在り処：ポリネシア・クック諸島の文化政策と伝統回帰運動」『民族學研究』61(1): 567-615.

長島怜央（2015）『アメリカとグアム：植民地主義、レイシズム、先住民』東京：有信堂。

安井眞奈美（2001）「ミクロネシアにおける芸術とアイデンティティの模索―第 8 回太平洋芸術祭参加者の選定をめぐって―」山本真鳥編『太平洋島嶼国における芸術とアイデンティティ:太平洋芸術祭を焦点として』pp.51-77.

山本真鳥編（2001）『太平洋島嶼国における芸術とアイデンティティ：太平洋芸術祭を焦点として』科研費報告書。

The 12th Festival of Pacific Arts in Guam and the Politics of Culture

Matori YAMAMOTO

《Abstract》

The 12th Festival of Pacific Arts was held between May 22 and June 4, 2016 in Hagatna, Guam. The Festival was first held in Suva, Fiji in 1976 to promote traditional culture among the nations-to-be in the Oceania Region when Western Samoa and Fiji were the only independent nations. Many of them have been undergoing a process of redefining their cultural identities after decades of foreign rule. Through the activities in the Festival, the Secretariat of the Pacific Community (SPC, South Pacific Commission in those days), which is the international organization to promote welfare and development in the region, planned to develop cultural identity of each country and to encourage mutual understanding and respect among them in order to cultivate a loose identity as Pacific people. The Festival has been held every four years and many countries have become independent since the first Festival. This time, 28 island nations and territories participated. The aim of the paper is to describe the anthropological research the author made during the Festival and to analyze her observation especially on the Festival's political underpinnings.